

昭和五十年度

資料調査報告書 第三集

『堀文庫』

鳥取県立博物館

目次

序にかえて

I 堀家資料の調査について ..... 1

II 堀文庫仮目録 ..... 3

    ・ I 文書・古記録 ..... 3

    ・ II 書・画 ..... 12

    ・ III その他図書資料 ..... 14

III 堀家について ..... 16

IV 堀家略系図 ..... 17

V 堀庄次郎について ..... 18

VI 堀文庫資料の概要 ..... 22

あとがき

序にかえて

資料調査報告書第三集を刊行することになった。昭和五十年度の資料調査は、「堀文庫」を中心に行い、これを仮目録とともに資料調査報告書第三集とした。堀文書は、昭和三十四年ごろ、堀千代氏が鳥取を去るに際して、自家に伝わる資料を県立鳥取図書館に寄贈され、これを受けた鳥取図書館は、一応整理して、「堀文庫」と名づけていた。しかし、この整理は、まだ充分ではなく、ほとんど公開もされなかった。昭和四十七年十二月、この堀文庫は、鳥取池田家史料等とともに、鳥取県立博物館に移管になった。

堀家は、享和二年に池田家に召出され、代々「御儒者」を勤める。三代庄次郎（敦齋）の活躍期は、嘉永四年ごろから元治元年九月までである。この期間には、鳥取藩の藩政改革期に当たり、庄次郎は、この改革の一つの重点政策であった学制改革に関与し、次第に藩政の中核にも参加するようになった。

藩政改革の担当者の多くは、彼の父静軒に教えられた人たちであり、藩政改革推進者を中心に尊攘派が形成されていく。庄次郎はその中において、その立場上からも理論的指導者であった。したがって、庄次郎に関する史料の多くは、鳥取藩幕末史を解明する上で重要な史料であるといえる。

これら貴重な史料を鳥取県に寄贈された堀千代氏は、神奈川県逗子に移られて後、お亡くなりになったと聞く。氏の御厚志に感謝するとともにその御冥福をお祈りする次第である。

堀文庫の諸資料は、池田家史料や先年当館に入った沖家資料などとともに、その利用によって、地方史研究がますます精緻になっていくことを確信している。

昭和五十一年三月

鳥取県立博物館長 木代 彰

I 堀家資料の調査について

堀文庫は、鳥取藩の儒臣堀家に伝えられた古文書、古記録その他の資料である。昭和三十四年ごろ、堀家の唯一の子孫堀千代氏は老後の身を、神奈川県逗子市桜山の娘大島千恵子さんのところに寄せることになった。鳥取を離れるにあたって、これらの資料を鳥取県立鳥取図書館に寄贈された。

県立鳥取図書館は、これ等資料を「堀文庫」と名づけ、萩原直正氏が整理にあたり、堀文庫目録が作成された。（鳥取県立鳥取図書館「郷土資料目録」昭和三十五年十一月二十日所収）この整理は、明治末年から大正期にかけて、堀緝熙氏が整理されていたものを踏襲し、これを(1)池田家関係、(2)堀氏関係、(3)堀緝熙氏関係、(4)杏庵（堀氏二世）関係、(5)省齋（堀氏三世）関係、(6)静軒（堀氏四世）関係、(7)浄戒院関係、(8)敦齋（堀氏五世）関係、(9)緝熙関係、(10)書簡、(11)書画の部、(12)図書の部の十二項目に分類したもので、利用には不便であった。

堀文庫の調査は、前述のように堀緝熙氏によって整理がなされ、書状、写本、文詩稿等の筆者を推定され大変便利である。この整理とは同じころ、つまり、明治四十三年から大正三年頃にかけて、鳥取藩史編纂所が調査にあたり多くの謄写本がつけられている。藩史編纂所の史料調査目録によると、

- 1 困事に係る書類 ..... 一綴
- 2 困事関係書類 ..... 一綴
- 3 公事心覚 敦齋 ..... 全九冊
- 4 竣後編 敦齋自稿 ..... 一冊
- 5 京都詰中日記 元治元年七月 ..... 一冊
- 6 熙明が京都詰中黒部権之介との対論筆記自筆稿本 漢文 ..... 一冊
- 7 亡父庄次郎君上書并ニ鳥取藩家老諸重役ニ与フル書束等 ..... 一綴
- 8 上書 ..... 六通
- 9 意見心覚書 ..... 五通
- 10 編修局の件 ..... 一通
- 11 御系譜の件 二宮へ ..... 一通

12	手束	廿六通
13	堀斎翁尚徳館御改正以来日記	三冊
14	思出し手録	一冊
15	教斎文詩	六冊
16	堀省齋遺稿 仮綴	七冊
17	静軒堀先生文	一冊
18	池田家諸礼式	一冊
19	東池田家系譜	一冊
20	大目附心得書類	一冊
21	藩政改革録	一冊
22	堀斎行状	一冊
23	自家業事日記	一冊
24	学思堂林先生行状 林竜庵ノ事	一冊

この調査には、鳥取藩史編纂長の湯本文彦と竹内吉次郎があたったようである。湯本は「堀斎年譜」(初稿)を書いているが、その序文に「堀氏年譜ハ一家ノ物ナレド、文久二年ヨリ元治元年ニ至ル正史ニテ、一藩重要ノ正史ナリ。此間ノ事実ハ之ヲ最トス。此事件ハ簡短ニシテ年表ニ入ルベシ。慶応三年冬ヨリ明治元年五月迄ハ安達ノ年譜最モ事実ヲ得タリ。同上。但ニ書トモ簡略シテ入ルヘシ」とのべている。

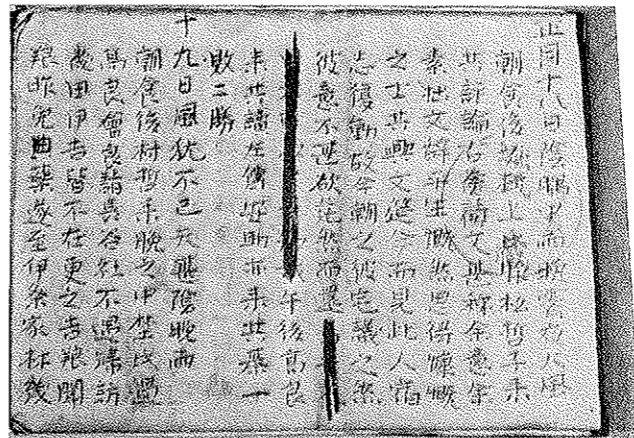
鳥取藩史は、明治四十三年から昭和八年まで、二十四年の歳月をかけて五十八巻の稿本が成立した。明治四十三年から大正二年くらいまでは史料調査を実施し、その後「鳥取藩史年表」十五冊が作成された。湯本が「……年表に入ルベシ」と述べている年表は、この「鳥取藩史年表」のことである。

藩史年表は、「鳥取藩史」五十八巻のための基礎作業であったのか、五十八巻の中には含まれず、多くの追記・貼付紙をつけたままで、浄稿本は作成されていない。

藩史年表は、大正五年十月ごろに一応完成し、編纂長の湯本文彦が校閲しているが、まだ未定稿である。構成は藩主一代を各一冊とするが最後の藩主慶徳については三冊となっている。

この年表の第十二巻(万延元年から文久三年)において堀庄次郎関係史料は重要な位置をしめている。それだけに、藩史編纂所の堀文庫の調査は、堀庄次郎関係史料が中心であった。しかし、庄次郎の日記は年表その他に多く引用されていながら、史料目録には記載されていない。

今回の調査では、現存する堀家史料の全体を明らかにすること、さらに、三十五年刊行の郷土資料目録「堀文庫」では、書簡、書翰集六冊と整理されて、内容がほとんど明らかでなかった書簡等について、出来るかぎりこの概要が知れるようにした。今回の仮目録では、I 文書・古記録、II 書・画、III 図書資料の三部に大別し、I の文書・古記録は関係する人物別に整理した。さらに、その中を、1 伝記・書上、2 日記、3 詩稿、4 文稿、5 写本、6 書状等に細分したが、この分類項目については、さらに検討を要する。



庄次郎日記  
嘉永二年正月

## II 堀文庫仮目録

### I 文書・古記録

1	池田家御系統	仮綴	四〇丁	一冊
2	池田家御系譜(備前家土堀英憲所蔵本写)	仮綴	四五丁	一冊
3	鳥取池田氏歴代早見表 写	一枚物		一冊
4	池田家系図因幡伯耆国主 (堀氏写)	長帳	一六丁	一冊
5	棟鄂一覽 (鳥取藩主池田侯爵家、支封東池田子爵家、支封西池田子爵家 承図、教斎写)	一枚物		三枚
6	池田家御系譜 (伊藤久太郎)	折本		一冊
7	本藩歴世御伝池田家御系統 (堀庄次郎教斎依命所認)	和綴	九三丁	一冊
8	羅国公御系譜草稿 堀金之丞 (堀静軒依命所認)	仮綴	六〇丁	一冊
9	齋親公御伝草稿 堀金之丞 (堀静軒依命所認)	横帳	二八丁	一冊
10	池田氏歴世伝記 (堀静軒依命所認)	和綴	二五丁	一冊
11	池田興禪院公贈位祭告文 (湯本文彦)	一枚物		一枚
12	因幡伯耆鎮守左近衛権少将從四位上源君墓碑 (堀静軒君撰書)	一枚物		四枚
13	池田侯代々御法号 (堀氏)	横帳		一冊
14	略御法号記 (徳川・池田・亀丸・池田支封・掟虚無僧ノ件、堀氏)	和綴		一冊
15	池田家諸礼式儀其他諸事 (西池田家・藩主池田家・堀氏写)	横帳		一冊
16	久世大和守広周書簡 (松平淡路守宛(西館))	一枚物		一枚
17	鳥取藩支封東池田家系譜 (初代仲澄より九代仲立まで)	横帳写		一通
18	心当養子願書 (西分知松平淡路守(池田清直)老中宛)			一通

1	堀家系譜・家祖関係	横帳		九通
2	堀金之丞家系譜上			
3	堀静軒家御備書			
4	堀家子孫熱誠堅守スヘキ件(城南故人堀静軒子敬)	仮綴		一冊
5	堀静軒 教斎に呈する文集 (堀熙明編)	仮綴		一冊
6	祿高印章 (堀敏雄・從二位公鳥取藩知事源朝臣慶徳奉)	一枚物		一枚
7	祿高印章遺存願 (堀熙明)	野紙		一通
8	論語解説 絶遊堂不惑著 (堀杏庵(周取)写本)	仮綴		一冊
9	本朝通紀抜萃 神武帝・近衛院 (長井定宗著・堀杏庵写本)	仮綴		一冊

1	堀敏伝稿本 竹内規南著 写本			一冊
2	鳥取藩儒臣省齋微詩稿 省齋自筆	仮綴		五冊
3	省齋先生遺文 写本	仮綴		一冊
4	中册試論 堀省齋著			一冊
5	聞略他合冊 堀省齋編 自筆			一冊
6	見聞雜纂一十冊 堀省齋編			一冊
7	4 文稿			
8	1 省齋夫子手録諸書抜書	横帳		一冊
9	2 扱仁便覽・論語・易説 省齋意見	仮綴		一冊
10	3 揆證真奎 同文通考抄 堀省齋写			一冊
11	5 校訂・写本の類			
12	1 居合・弥和羅目録写 堀省齋筆 元文四・五			一冊
13	2 薬壇草譜 堀省齋写			一冊
14	3 韓退之論仏骨表 堀省齋			一冊
15	4 詩林広記抄 堀省齋写本	和綴		一冊
16	5 雑録・江陵集他抜萃集 堀省齋写本	仮綴		一冊

6 入越記他拔萃集 堀省齋写本 仮綴 一三二丁 一冊  
 7 六経略説他拔萃集 堀省齋写本 仮綴 一六一丁 一冊  
 8 江戸名物狂詩選 方外道人著・五十三次道中詩選 雲輔先生著・蕪蘿山人校 堀微(省齋)写 仮綴 二五丁 一冊

四、二代 静軒関係

1 堀静軒書上 範胤・金之丞原本 横帳 一冊  
 2 堀静軒伝稿本 竹内吉次郎著・堀緝熙写 仮綴 四丁 一冊  
 3 日記 記録 長帳 八冊  
 1 鳥取藩儒官堀金之丞静軒君目録 堀静軒自筆 横帳 一四丁 一冊  
 2 堀省齋・静軒公事心覚 享和二文化六 横帳 一〇丁 一冊  
 3 堀静軒公事心覚 嘉永三・五、四・七 横帳 一〇丁 一冊  
 4 静軒夫子咏草 堀静軒筆 横帳 一冊  
 5 文稿 横帳 一冊  
 1 静軒・敦齋見聞録 自筆 堀緝熙編 仮綴 二二丁 一冊  
 2 堀家文叢 静軒文 堀緝熙編 袋綴 七丁 一冊  
 3 岐蘇・日光道程名勝旧蹟 堀静軒 長帳 一六丁 一冊  
 4 鳥取藩儒臣静軒堀先生文 堀静軒自筆 一冊  
 5 校訂 写本の類 十冊  
 1 毛詩補義 漢毛公伝・岡白駒補写本 堀静軒写本 二〇丁 一冊  
 2 紀効 堀静軒 天保十三巳亥八月 一冊  
 6 書状 一冊  
 一、静軒書状 年月不明 貞女嫁入決定のことを聞いた。嫁入仕度のこと、貞女に申し聞かせる嫁入についての心得など。 一通

二、静軒宛書状

1 田村貞彦 年不明六月十日 貞彦実家(村上家)養子 一通  
 2 二宮全之助 年月不明 国許より江戸詰の静軒え 一通  
 3 高浜とし 年不明三月八日 帯地、世話になった御礼 一通  
 4 建部様齋 年月日不明 内容不明 三通  
 5 中村 貞(操) 年月日不明 和歌大はやりにて、よまぬものはない様になった。自分もよめる様になりたぬものと思う。 一通  
 6 〃 年月日不明 中村家家風、近況等 一通  
 7 伝書 堀金之丞静軒(授与の伝授書) 匹田流、竹林流大口派 大野又兵衛 六枚綴 一冊  
 大野道之介 文化三

五、三代 敦齋

1 先君子履歴書 堀緝熙編 写本 明治二六・七 一通  
 2 堀庄次郎年譜 湯本文彦編 堀緝熙写 一冊  
 3 堀庄次郎贈位記 宮内大臣三位勲一等男爵波多野敬直宣 大正四・一 一通  
 4 堀庄次郎贈位沙汰書 宮内省 大正四・一 一通  
 5 故大目付堀熙明 竹内吉次郎編 写 九丁 一冊  
 6 敦齋堀先生行状 堀緝熙著 一冊  
 7 堀庄次郎(熙明)正居士墓標 田村復齋筆 拓本 一枚  
 8 堀敦齋夫子御贈位関係 堀緝熙編 一冊  
 9 敦齋堀先生贈位報告祭告文 湯本文彦文 大正五・一 一通  
 10 堀庄次郎祭告文 堀緝熙文 大正五・一 一通

11 堀庄次郎祭告文 竹内峴南 大正四・一 一通  
 12 堀庄次郎五十年祭告文 宮崎貞藏 一通  
 13 堀庄次郎祭告文 林良造文 大正二・九 一通  
 14 堀敦齋先生夫妻墓碑文 男堀緝熙撰 拓本 四枚  
 15 敦齋夫子門人帳 三一丁 一冊  
 16 贈從五位堀敦齋年譜初稿 湯本文彦著 写本 六一丁 一冊  
 17 堀敦齋書上付鉄一書上 原本 横帳 一冊  
 2 日記・記録  
 1 堀熙明(敦齋)日記 嘉永二・一、文久四・九 漢文体 一七冊  
 2 堀熙明公事心覚 嘉永五・一、文久三・一 九冊  
 3 尚徳館御改正以来日記 堀敦齋 安政七、万延二・六 三冊  
 4 京都詰中日記 堀敦齋 元治元年甲子七月 三三丁 一冊  
 5 御目付役被仰付候始より日記 元治元 堀敦齋 一九丁 一冊  
 6 思出し手録 堀敦齋 一八丁 一冊  
 3 詩稿  
 1 敦齋夫子詩并和歌 堀敦齋自筆 堀緝熙編 仮綴 一冊  
 2 敦齋夫子詩并自筆 堀緝熙編 仮綴 一冊  
 3 敦齋詩稿 堀敦齋著 和綴 一冊  
 4 敦齋詩稿 堀敦齋著 横帳 三五丁 一冊  
 5 敦齋文詩 堀敦齋著 堀緝熙編 仮綴 一冊  
 6 敦齋夫子文詩 堀敦齋自筆 仮綴 一冊  
 4 文稿  
 1 敦齋文稿 堀庄次郎 和綴 一冊  
 2 敦齋意見書 堀庄次郎 元治元年 横帳 一冊  
 3 生育問答 堀庄次郎 仮綴 一冊  
 4 後編 堀敦齋著 堀緝熙写本 和本 一冊  
 5 敦齋夫子著述献策碑文銘 文久二、元治元年 仮綴 一冊  
 6 開地百問方位 堀敦齋 一七丁 一冊  
 7 藩主星の占を垂問せらるゝに對しての意見答申書 堀敦齋 六丁 一冊

1 釈業略式 堀敦齋著 原本 仮綴 一四丁 一冊  
 2 説易備忘録 堀敦齋 一冊  
 3 鈴録注釈ノ異議辨解 堀庄次郎 三三丁 一冊  
 4 上書案ノ攘夷について等 軸 一冊  
 5 上書案ノ時勢を論じ朝廷への忠節を論ず等 軸 一冊  
 6 上書案ノ藩内外人心の統一尊皇攘夷について等 軸 一冊  
 7 敦齋与黒部権之介議論問答 文久三年 軸 一冊  
 8 堀敦齋遺稿 写本 和綴 三冊  
 5 写本の類  
 1 因幡国全圖 堀庄次郎写 嘉永四・二 疊物  
 2 易学啓蒙纂要全 金子齋民著 江戸 堀熙明写 安政四年 和六九丁 一冊  
 3 春秋左氏伝質疑備忘録 堀敦齋写 仮綴 一冊  
 4 春秋左氏伝拔書 堀敦齋写 仮綴 一冊  
 5 草木雅名 堀敦齋編 三七丁 一冊  
 6 堀敦齋写本 宋書雜記三・通鑑綱目抜全・資治通鑑抜全一五一丁 一冊  
 7 堀敦齋写本 後漢書抄全 南齋書雜記二・染書雜記全 晋書摘要全 唐書網 九七丁 一冊  
 8 堀敦齋写本 宋史抜書 新書抜萃 左伝劉子等抜書 六六丁 一冊  
 9 堀庄次郎(敦齋)写本 周官抄書 五七丁 一冊  
 10 周易経伝 程朱・堀熙明註記 寛永四 木版 四冊  
 11 詩経(詩経集中)全八卷 朱熹集伝：堀熙明註記 京都 今村八兵衛 享保九・一 四冊

1 荻野流大銃免状 堀庄次郎伝受 安政二・一 一通  
 2 竹夫人関係  
 1 堀竹表彰辞令 鳥取県知事三松武夫 大五・三・三 一通  
 2 堀竹夫人欽仰之辞 鳥取県立鳥高等女学校 大正五・三・一九 三枚

3	堀竹肖像	木炭画	一枚	13	土肥実匡宛	年不明 四月二日 國事の為尽力をたゞえ、今一通 後の言動過激にすぎない様たしなめる。
1	堀庄次郎旗差	麻	一枚	14	土肥実匡宛	文久二年九月廿九日 伏見一件以来の京地状勢を 報じ、その件について大原公に對面して疑をいた。
2	藩政を憂うるの書	堀庄次郎 文久三・七 写真複製	一枚	15	二宮元助宛	(万延元年か) 正月廿日 池田家承譜校正について 年月不明 谷口吉郎著「鈴録問答」につ いて批判(書込返書)
6	書状			16	中村宛か	年月不明 中村操自書について
1	一、庄次郎書状および書状案			17	宛所不明	安政二年十一月廿一日 安政二年大地震困もとの 状況を知らせる。
1	明石友右衛門宛	安政五年	一通	18	中村宛か	年月不明 中村操自書について
2	荒尾某	文久三年七月	一通	19	星占いのこと(残欠)	安政五年八月五日 星占いのこと(残欠)
3	加藤十郎宛	五月	一通	20	君上周旋の事感謝している。	文久二年十一月廿一日 君上周旋の事感謝している。 長州周旋方佐久間のこと、彦根のこと等
4	神戸源内宛	元治元年六月十四日	一通	21	長州周旋方佐久間のこと、彦根のこと等	文久二年十一月廿一日 君上周旋の事感謝している。 長州周旋方佐久間のこと、彦根のこと等
5	白井重之進宛	文久二年九月朔日	一通	22	脱藩五人の者処分について	文久二年極月廿四日 脱藩五人の者処分について
6	〃	かしてほしい(慶徳東行周旋のことか)	一通	23	藩主、学習院で復命を終え	文久二年十二月廿日 藩主、学習院で復命を終え たことを報ず。困許の情勢、先生の尽力を願う (文久三年七月か) 高台寺焼打のこと(残欠)
7	(杉浦) 萬之丞宛	文久三年十月七日	一通	24	疾と称して辭職を請う	文久三年四月廿六日 疾と称して辭職を請う
8	高崎猪太郎宛	文久二年十一月十一日	一通	25	砲撃一件をきく。その節事件の処置等について	〃 六月廿日か 中野治平から天保山沖英船 砲撃一件をきく。その節事件の処置等について
9	田村貞彦宛	(安政元年か) 五月廿一日	一通	26	長州への使者延引について	元治元年六月十七日 長州への使者延引について の風説(書込返書)
10	〃	報じ、鳥取では朋党の姿となったと聞いている。	一通	27	甘士を愚坂呼返しについて	元治元年 甘士を愚坂呼返しについて
11	〃	文久二年九月十日 用人処分に關する田村意見	一通	28	山本兄弟・後藤は黒部 他	〃 山本兄弟・後藤は黒部 他 家の縁なり、此三人と左久馬・加須屋の紛擾か ら落着までと、十九士の処遇について口添する。
12	〃	(文久三年か) 五月十三日 貞彦隠居、息平四郎家	一通	29	辭職催促(残欠)	年月不明 辭職催促(残欠)
		督相統許可について歡びをのべる。		30	堀家族宛	江戶上野天狗さわぎの事 (残欠)

31	母静智院宛	年月不明	一通	46	妻竹宛	元治元年正月廿七日 岩井湯治先より、中野良輔 万一(死去)の時の指示 入在のこと等
32	〃	嘉永五年十一月十七日 上京後の様子を知らせ、一 留守宅へ家政のこと等指示・依頼する。	一通	47	〃	元治元年七月十六日 京都での勤向のこと、京都 次第に六ヶ敷模様となり心配している。
33	〃	嘉永六年三月十九日 江戶における縁者の近況と 田村貞彦酒のみすぎを案じる。	一通	48	〃	元治元年八月八日 京都より、拾、下着等入用 衣類の送付依頼
34	姑西村宛	嘉永六年正月	一通	49	家族宛	文久二年四月六日 岩井温泉入湯先より近況を 知らせる。
35	〃	〃 八月五日 伯母(〃)の奥向勤につ いて紛擾あり。	一通	50	〃	元治元年七月廿二日 禁門の変陣中の様子を知ら せる。
36	〃	年月不明	一通	51	鉄一宛	元治元年八月 京都より学業の指示を与え 京都の生活を知らせる。
37	伯母谷河宛	文久二年七月廿日	一通	52	鶴殿主水介宛	元治元年八月 討長についての意見
38	妻竹宛	安政四年	一通	53	竹書状 吉岡宛	新年挨拶状
39	〃	安政四年五月六日	一通	1	二、庄次郎宛書状	年月日不明 庄次郎留守中の学校の様子 を報告、江戶での勤をねぎらう。
40	〃	安政四年九月五日	一通	2	〃	年月不明 御前様方の御発興掃國の日 程変更により、学校終筈日の変更を知らせる。
41	〃	安政四年十一月	一通	3	〃	嘉永六年 江戶詰残暑見舞。行徳火事 のため自宅焼失を知らせる。
42	〃	元治元年七月七日	一通	4	安達清一郎	万延元年十月廿九日 面談いたしたいことあり、 今日午後來宅ねがいたい。
43	〃	文久二年十二月十日	一通	5	〃	文久二年十月廿八日 京都より、江戶表の周旋の 様子が知りたい。景山竜蔵は非常の恩命を蒙り 有難いことではあるが、正垣は屯戌の兵と混じ 居り気の毒である。何とかしてやりたい。
44	〃	文久三年一月二日	一通	6	〃	文久三年九月十四日 静軒年忌のこと。甘士への 御裁許あり、一同油小路御屋しき御引取となる。
45	〃	文久三年九月十四日	一通			

(黒田)・景山と小子(安達)、大原公に招かれた。執政・参政とも愚暗で困ったものだ、大原公もこのことには同情しておられる。

7 安達清一郎 文久二年十二月朔日 江戸での藩主周旋について一通  
 知らせてほしい。正垣・田中恒蔵の処遇のこと。  
 8 文久三年正月廿五日 栗田宮・正親町三条公より一通  
 近衛関白退職差留メ周旋の依頼があった。  
 9 文久三年六月十二日 京都の事情を報じ、藩主の上京を至急実現するよう尽力を請う。一通  
 10 文久三年八月廿七日 大兄方には草稿を作成しておいてほしい。過日提出の建白草案は一部修正の上差出しになった。一通  
 11 元治元年三月廿一日(退引中の庄次郎にあてたもの) 神戸源内の力となり、田翁、津田翁と共に国事のため力添へねがいたい。一通  
 12 元治元年八月廿八日 建白については、門脇少造が掃国したのできてほしい。藩の建白については長州の模様について確報を得てからがよい。一通  
 ※13 年不明四月廿三日 石梁翁出処について。一通  
 14 岡嶋正義 元治元年三月十六日 岩井入湯中の作詩を拜見した。自分は思う様に作詩がはかどらない。一通  
 15 佐善元立 文久三年十一月九日 京都では、脱走者の裁許がきまり、景山も遺慮というが甘士に別条はないか等心配している。一通  
 16 正垣 薫 文久三年十一月十五日 庄次郎の退職隠棲をなくさめ、京都の様子を報告、また生野事件についての詳報を送る。一通  
 17 年不明 本代送り状 一通  
 18 田村貞彦 安政元年正月五日 御国海防策について二・三一通

20 田村貞彦 策認め月番家老まで提出した。年不明 十一月五日 芝邸のこといまだ評儀がなされず心痛している。鑑新造につき威系注文の事手配した。一通  
 21 年不明 堀家来のこととわり 一通  
 22 六月十八日 吾党今宵階進ミ力を合せ、時節迄へ鉄鎖を以ても繋ぎとめたいと思つている。鶴殿評判のことなど。一通  
 23 叔母谷河 年月不明 庄次郎病氣見舞 御奥奉公人のこと、御右筆 一通  
 24 年不明 宝隆院様御引移について、年不明五月廿六日 宝隆院様御引移について、御参勤等についての町人風聞など。一通  
 25 文久 年七月八日 谷河退引願容易に聞いたられず。一通  
 26 安政六年十一月廿三日 庄次郎学校交場学正を命じられたのを祝い、学校の振興すべきをよろこぶ。一通  
 27 万延元年二月九日 御国への御供の件、内命もあつたということだが、いま三・四年江戸に留まりたいので尽力してほしい。一通  
 28 文久三年二月七日 大樹公上洛前に上京したいとのこと藩主に申し上げた。貴兄を呼寄せることになった。今便にも通知が行くと思う。一通  
 29 文久三年十一月廿二日 一橋公上京がはかどっている、左衛門様危篤のこと等京都の近況を知らせ、家人への伝言をたのむ。一通  
 30 元治元年正月六日 年賀状。尚々、帰郷したいが、將軍上洛、朝暮より藩主召出にそなえ天幕の様子をうかがっている。長州周旋むつかしい。一通

32 土肥謙蔵 元治元年一月十七日 学正仰付らる。土肥謙蔵長州行止メのこと、開鎖議論など京地の様子を固許へ知らせる。一通  
 33 中野治平 元治元年三月十三日 参予会議分裂、征長等の議論は中止となった。一通  
 34 元治元年四月八日 國談不特定、荒尾但馬の復職もならず。一通  
 ※35 中村九郎 昨夜鳥取へ到着、土肥君への面会を配慮していただき有難い。貴兄にも面会したい。一通  
 36 (長州藩士) 万延元年八月 藩主池田慶徳実父徳川斎昭逝去につき、藩主・家中の忌服取扱について。一通  
 37 二宮元勛 安政五年 病氣見舞、学館祭神の議論等、当時の学館の様子問合せ。一通  
 38 初野善蔵 年月日不明 内容不明 一通  
 39 某氏 三四丁 一通

6 四代 續照 三四丁 一通  
 4 文 稿 九〇丁 一通  
 5 校訂・写本の類 一冊  
 1 薄頭散人文稿 詩 堀緝熙著 原本 一冊  
 2 日本諸家文 堀緝熙写 一冊  
 3 唐三体詩絶句 清高士苛齋人 堀緝熙写 一冊  
 4 今古九十一家絶句綿繡屏風 檜崎隆存編・堀緝熙写 明治一七八 一冊  
 5 傳吾集他合綴 吉田松蔭著 堀緝熙写 一冊  
 6 近世先哲叢談前編・続編 松村操編・阪谷朗廬校閱 堀緝熙写 明治一六・八 一二二丁 二冊  
 7 通議 頼山陽著・古賀教堂評 堀緝熙写 明治十六・五 和綴 一冊  
 8 及門遺範全 会沢安著 堀緝熙写 和綴 一九丁 一冊

8 古今註 晋崔豹著 堀緝熙写 和綴 一冊  
 9 兵話(拙堂兵話) 斎藤謙有輯 堀緝熙写 明治十二 一巻ノ八巻 六九丁 一冊  
 10 温公史論鈔 堀緝熙写 飯綴 一冊  
 11 省心録他合冊 宋林和靖 堀緝熙写本 横帳 一冊  
 12 王法論 鳥尾小弥太著 堀緝熙写 折本 一冊  
 13 裸鈔 堀緝熙写 横帳 一冊  
 14 見聞隨錄 堀緝熙写編 編者写 横帳 一冊  
 15 日本略地名記 堀緝熙写 横帳 一冊  
 16 古今裸詩集 堀緝熙写 横帳 一冊  
 17 歴史音釈 写本 堀緝熙写 明治三 六七丁 一冊  
 18 雪月花他合冊 堀緝熙写 三二丁 一冊  
 19 随見技書 堀緝熙写 三八丁 一冊

6 書 状 五五枚綴 一冊  
 1 一、堀緝熙宛 竹内吉次郎 湯本文彦書集 堀緝熙宛 明治四四ノ大正十 一通  
 2 竹内吉次郎 明治四三年二月 藩史編さん事務連絡 一通  
 3 六月廿八日 土佐勤王史に記された堀庄次郎のこと。 一通  
 4 明治四四年七月 桂小五郎書状(写) 庄次郎宛 一通  
 5 大正十年十月十八日 藩史編さん事務辭職について 一通  
 6 年月日不明 藩史編さん事務所移転について 一通  
 7 料収集について 高知市大水害の状況及藩史資料 一通

11 士肥謙蔵 明治廿五年四月十六日 藩史資料収集について 一通  
 林 良造 年不明 八月卅日 向国安養僕治助之碑文章稿についで 一通  
 12 〃 〃 〃 〃 〃 一通  
 13 〃 〃 〃 〃 〃 一通  
 14 〃 〃 〃 〃 〃 一通  
 15 湯本文彦 明治四四年八月廿五日 庄次郎関係史料について、調査、収集方の協力を求める。 一通  
 16 〃 〃 〃 〃 〃 一通  
 17 佐藩元立 年不明 庄次郎関係史料について 無音を詫げる。 一通

七、谷河関係

1 尾嶋書上 横帳 一冊  
 2 堀谷河君略歴 堀編撰述 四丁 一冊  
 3 谷河君形見分配帳 横帳 九丁 一冊  
 4 浄戒院中陰法会品目 天眼寺 文久二・八 一通  
 5 浄戒院三堂金覚 天眼寺 祝山 長瀬宛 文久二・八 一通  
 2 日記・記録  
 1 尾嶋婦園道中日記、勝見入湯日記 堀谷河自筆 嘉永六・三・六・五 三六丁 一冊  
 3 詩稿  
 1 霞月発句集 堀谷河自筆 横帳 二冊  
 2 瑞穂舎詠草 堀谷河自筆 八冊  
 3 谷河短冊集 五八枚 一冊

6 書状

1 堀 静軒宛 年月日不明 上様よりの頂戴ものについて 一通  
 2 〃 〃 〃 〃 〃 一通

6 退食園記 稻村三伯著 写本 六丁 一冊  
 7 河田屏浦先生藝規 佐善船山写 天保十三・二 九丁 一冊  
 8 呈堀学正論学制書 安達忠 五丁 一冊  
 9 二十二士懐中書 写本 文久三・八・一七 三四丁 一冊  
 10 稲葉民談 小泉友賢 写本 三八丁 一冊  
 11 西南戦争官軍に応募を勧める書 池田慶徳 明治十・六 一枚  
 12 池田贈正二位公へ御上仲書 御遺書 松平仲律 堀庄次郎写 一枚  
 13 河村郡美徳山開基原由 写本 一枚  
 14 詩文集 堀編撰述 竹内吉次郎 橋柴水竹 鈴木溪水 林良造 二二三丁 一冊  
 15 諸名家詩文集補遺 写本 一六丁 一冊  
 16 勝徳院様御文并和歌真筆 (8代藩主斎藤長女松平下總守室) 長帳 一六通  
 17 鶴殿氏墓碑取調 岩美郡立浦富水産学校編 一冊  
 18 復斎田邸翁略譜 堀編撰述(奥平源八敵討之事合綴) 二二丁 一冊  
 19 冠位沿革便覧 源伴雄著 写 弘化四・一 疊物 一枚  
 20 鳥取池田藩諸臣御礼席帳 万延 文久年代 横帳 八一丁 一冊  
 21 東武刑名条例 写 田村貞彦写 横帳 一冊  
 22 当家積物之巻 小笠原大膳太夫長時 遺伝上田茂樹春統(佐藤長健門人) 二九丁 一冊  
 23 細川越中守殿御息中務左輔殿(被進) 細川越中守写 堀熙明写 一六丁 一冊  
 24 飛鳥山碑 元文 横帳 五丁 一冊  
 25 諸書抜書 堀教斎写 万延 文久 横帳 一冊  
 26 令義解一十 写本 安永五・五・八 四冊  
 27 救荒便覧・玉くしげ下 写本 九六丁 一冊  
 28 玩鶴先生詠物百首 甲賀玩鶴著 端隆文校 写本 四冊  
 29 日本書紀 写本 五三丁 一冊  
 30 和漢歴代考勘 和漢銭形 写 一五丁 一冊

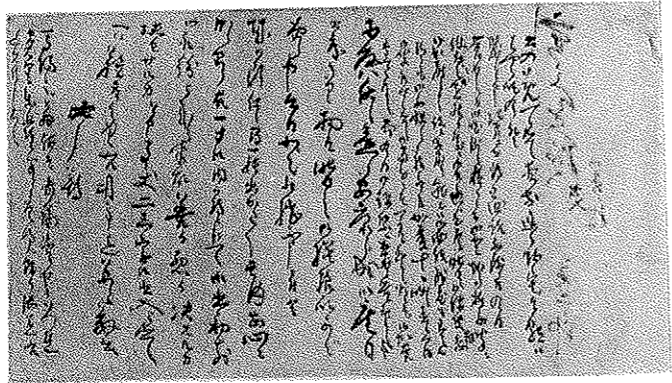
二、谷河宛書状

1 静智院 安政二年八月 淡路守様(西館)家臣八尾徳右 一通  
 2 〃 〃 〃 〃 〃 一通  
 3 建部機斎 〃 〃 〃 〃 一通  
 4 山内峰三郎 年不明十二月廿七日 時候挨拶、無音を詫げる 一通  
 5 中村 貞 年月不明 谷河婦園のこと、祖母へ帯を送ってほしい。 一通  
 6 〃 〃 〃 〃 〃 一通  
 7 某女 年月日不明 おじまに半年の休暇たまう 一通  
 1 国事ニ係ル書類 堀編撰述 写 文久二 一冊  
 2 研志堂遺稿 正瑞齋著 堀熙明写 五六丁 一冊  
 3 正瑞氏認候所の学政之次第書 堀熙明(敦斎)写 横帳 一冊  
 4 肥前鶴嶋候弘道館学政之次第 堀熙明(敦斎)写 横帳 一冊  
 5 大目付心得書類 堀 熙明写 横帳 五号 一冊

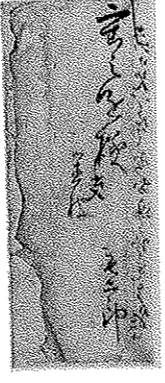
II 書・画

1	一の1 書 省齋・敦齋	一枚物	八枚	4	池田定常(冠山)書 寄文獻吉岡先生	軸物	一幅
1~8	堀省齋(吉岡玄溪)書	一枚物	一枚	5	佐善元立筆 呈亡友敦齋堀先生之靈詩	半折	一枚
9	土方稻嶺函軸 堀省齋贊	軸物	一幅	6	小谷范菴書	横書き	一枚
10	堀省齋筆 (園林無世情)	軸物	一幅	7	河田貫堂筆 采送堀君子光煇因州序	仮表装	一枚
11	鳥取藩儒臣堀敦齋夫子詩并書(漢詩七言絶句 安政六)	書軸	一幅	8	江馬天江翁書 漢詩	横書	一枚
12	堀熙明詩・稲雀画・三村琢詩 霞洋画	条幅	一枚	9	内野武次郎(太白山)書 立為堀君	横書	一枚
13	堀竹書(寿) 竹八八才の祝ニ	軸	一幅	10	荒木正国撰書 中秋送堀君子光煇落	条幅	一枚
14	省齋先生書習字手本	横帳	一本	11	川上啓齋書		一六丁 一冊
15	省齋書扇面		一本	12	習字手本 雪山 趙子昂・王羲之 写本		一六丁 一冊
16	堀省齋筆版本 風嘯		一枚	13	祝允明枝山筆跡写		残欠十二枚
17	鳥取藩備省齋堀敦齋先生書習字手本	仮綴	一冊	14	習字手本摺本 筆者不明		八丁 一冊
18	堀省齋筆習字手本		一冊	一の4 拓本			
19	唐人古詩七首 堀省齋写		一冊	二画			
20	初登山手習教訓書 堀省齋筆		一冊	1	竜鱗亭画弓ヶ浜	絹布	一枚
21~22	堀省齋筆習字手本		二冊	2	梅図 池玉蘭上書(堀緝熈考証)あるも不明	軸物	一幅
一の2	書 建部 齋・田村貞彦		二冊	3	常重画(馬) 堀庄次郎賛		一幅
1	建部模齋書	軸物	一幅	三 短冊(和歌・漢詩・画)			
2	建部模齋詩筆	半折	一枚	1	堀庄次郎敦齋和歌	短冊	三枚
3	建部模齋書	軸物	一幅	2	堀庄次郎敦齋漢詩	短冊	三枚
4~7	建部模齋書簡	折本	四冊	3	堀竹表彰祝賀短冊	竹内万寿子(峴南夫人)	二枚
8	田村貞彦書 号復齋	軸物	一幅	堀竹表彰祝賀短冊	鈴木源太郎	一枚	一枚
9	田村貞彦(復齋)書習字手本	折本	一冊	堀竹表彰祝賀短冊	西村秀兵衛 鷺	一枚	一枚
10	垣屋由字書習字手本		一帖	徽運和歌短冊		一枚	一枚
一の3	其の他						

2	新貞老和歌	短冊	二枚
	安部晋和歌	短冊	二枚
	飯田年平和歌	短冊	二枚
	石上魯庵和歌	短冊	一枚
	石川依平和歌	短冊	一枚
	池田齋稷短歌	短冊	一枚
	池田齋稷長女繼姫(晴子)和歌	短冊・色紙	三枚
	池田阿つ子		一枚
	池田春岐守仲津俳句	短冊	一枚
	太田垣蓮月和歌	短冊	一枚
	大原重徳卿和歌	短冊	二枚
	門脇重綾和歌	短冊	二枚
	加須屋武義和歌	短冊	一枚
	小谷古蔭和歌	短冊	二枚
	樺城寸風短歌	短冊	三枚
	象八十子和歌	短冊	二枚
	雪学俳句	短冊	二枚
	正端通勉書画	短冊	二枚
	篠田惟成和歌	短冊・色紙	三枚
	辻直方和歌	短冊	三枚
	高浜正義漢詩	短冊	一枚
	中嶋宣門和歌	短冊	一枚
	中山忠能和歌	色紙	一枚
	ミサ子和歌	短冊	三枚
	源永好和歌	短冊	四枚
	宮原積和歌	短冊	二枚
	関中納言基茂卿和歌	短冊	一枚
	むら岡和歌	短冊	一枚
	読入しらず	短冊	五枚



堀庄次郎書状 白井重之進宛 文久二年九月朔日  
(書入返書 白井重之進)(五-6-5)





III その他圖書資料

- 1 名和氏紀事上・下 (高德館藏 文久二) 和本 五三丁 二冊
- 2 鉄鞭集 (新聞切抜) 折本 一冊
- 3 汲古録上・下 (儒士・詩人・文人・新聞切抜) 横帳 二冊
- 4 鳥取県管内全圖 (清水常太郎編 大阪 中村芳松 明治二八・五) 一枚
- 5 祿券假証書御下附願 (池田慶徳 明治十・六) 合綴 三丁 一枚
- 6 鳥取藩政時代の教育概要 (竹内峴南講演 新聞切抜) 横帳 一冊
- 7 東漢會集纂略 (萩野求之輔撰 江戸 須原屋兵衛 安永八) 一六丁 一冊
- 8 弘道館記述義上・下 (藤田彪 水戸 吉成氏藏 明治二・五) 二冊
- 9 新論 (会沢安著 水戸 萩野谷藏版) 和本 四五丁・四〇丁 二冊
- 10 靖献遺言 (浅見安正著 堀根照註記 京都 風月堂 慶応) 卷一・卷八 一六・八丁 一冊
- 11 四書纂要一 (金子齋民著 芳州軒 安政五) 大学上 三三丁 一冊
- 12 四書纂要二 (金子齋民著 芳州軒 安政五) 大学下 三三丁 一冊
- 13 四圖集註全五卷 (後藤芝山訓点 東京 金港堂 明治一四・十) 五冊
- 14 經典余師 (小学之部) 六三丁 一冊
- 15 王陽明文粹 (村瀬海輔編 東京 松田幸助 明治一三) 四冊
- 16 白鹿洞書院揭示問 (佐藤坦述 江戸) 一三三丁 一冊
- 17 豈好辯 (会沢安著 玉巖堂 安政四) 二四丁 一冊
- 18 不抽緯 (蒲生秀実 (君平) 著 松下邸塾 文化四・六) 一八丁 一冊
- 19 回天詩史上 (藤田東湖著 京都 小川太左衛門 明治二) 二冊
- 20 標題徐狀元補注蒙求上・中・下 (江戸 山崎金兵衛 寛政元) 二六丁 一冊
- 21 三字經 (大橋順著) 木版 一八丁 一冊
- 22 小栗略録起他合冊 一三丁 一冊
- 23 和漢年契 (山崎美成校正改訂 大阪 敦賀屋九兵衛 万延元) 和綴 四八丁 一冊
- 24 和漢歷箋 (増補改正 東京 千鍾房 安政二・四) 折本 一冊
- 25 先哲叢談前 (原善・東條耕共著 東京 松榮堂 明治二五・十二) 一九四・五九丁 一冊
- 26 先哲叢談後 (東條耕著 東京 松榮堂 明治二五・十) 二一五丁 一冊
- 27 近古史談 (大槻清崇著 京都 大阪 村岡勘兵衛 慶応四) 六十丁 一冊
- 28 活語自他捷覧 (横山由清著 月舎 安政四・二) 折本 一冊
- 29 広益正字通 (鎌田環齋編 加唐復齋校 江戸 須原屋茂兵衛 安政二) 二五七丁 一冊
- 30 掌中熟字韻箋大成 (沢渡校 東京 水引堂 慶応三・九) 折本 一帖
- 31 名乗字引 (高井蘭山輯 清問齋補 増補 竹山塾 安政二) 四七丁 一冊
- 32 萬葉集類葉鈔上・下 (村上圃方輯・村上潔夫選 浪華書林) 二冊
- 33 古今和歌集遠鏡上・下 (本居宣長著 山崎美成頭書 大阪 石田忠兵衛 明治三六・四) 二冊
- 34 菅贈太政大臣歌集 一冊
- 35 芳雲除情 (菊池保定編 大阪 芳雲社 明治一七・三) 一七丁 一冊
- 36 畫引小説字彙 (秋水園 大阪 山口又一郎 寛政三・一) 一〇五丁 一冊
- 37 日本詠史新案府 (中島子玉著 京都 文石堂 明治二) 三三丁 一冊
- 38 麓谷詩 (溪麓谷著 谷文晁編 寛政六) 三〇丁 一冊
- 39 林園月令初編・二編 (館機編 江戸 英大助 天保一四) 四冊
- 40 名蹟詩史 (日本歴史地理研究会 東京 六盟館 明治三三・一〇) 三五二丁 一冊
- 41 錦浦唱和 (竹内吉次郎著 鳥取 因伯時報社 明治三三・四) 二四丁 一冊
- 42 詩韻含英同辨一・二 (劉文蔚編 江戸 須原屋茂兵衛 嘉永七) 一三六丁 二冊
- 43 詩語對句自在 (内山牧山著 江戸 須原屋茂兵衛 嘉永三) 横帳 四冊
- 44 唐宋千家聯珠詩格上・下 二冊
- 45 掌中唐宋詩學類苑大成 (鎌田環齋輯 桂淡水増補 増補版 東京 須原屋茂兵衛 明治四) 折本 一冊
- 46 彌補増字掌中詩韻牋 (新刻 江戸 須原屋茂兵衛 天保八) 折本 一冊
- 47 榜笈配祀池田慶徳公略伝 (榜笈神社臨時祭協賛会編 昭和二・七 鳥取編所) 飯綴 七五丁 一冊
- 48 佩弦齋外集上 (青山延光著 水戸 鉄槍齋 慶応二) 一四丁 一冊
- 49 佩弦齋外集下 (青山延光著 水戸 鉄槍齋 慶応四) 一八丁 一冊
- 50 赤穂義人録下 (園枝惟熙著 愛知 静観堂 明治五) 三七丁 一冊
- 51 大成武鑑二卷 (御大名衆) 二二五丁 一冊
- 52 大成武鑑三卷 (御大名衆) 二二四丁 一冊
- 53 大成武鑑四卷 (御役人衆) 一四五丁 一冊
- 54 大成武鑑五卷 (西御丸御役人衆) 一三三丁 一冊
- 55 御三家方御付 一五丁 一冊
- 56 文化四丁卯歳改正武鑑 (江戸 須原屋茂兵衛) 横帳 一冊
- 57 雲上明覽大全上 (慶応元年) 六七丁 一冊
- 58 雲上明覽大全下 (江戸 須原屋茂兵衛) 一四丁 一冊
- 59 萬代寶鑑 (江戸 須原屋茂兵衛 安政五) 折本 一冊
- 60 大成和漢書函集覽 (広覚道人 弘化年代 江 丁子屋平兵衛) 横帳 八九丁 一冊
- 61 新增細見京繪圖大全 (文久改正 京都 竹原好兵衛) 疊物 一冊
- 62 御江戸大図 (文化改正 江戸 須原屋茂兵衛 文化一四) 疊物 一冊
- 63 御江戸大絵圖 (文政改正 江戸 岡田屋嘉七 安政三) 疊物 一冊
- 64 萬國掌覽圖 疊物 一冊
- 65 諸國道中袖鏡 (江戸 岡田屋嘉七 天保十) 横帳 六四丁 一冊
- 66 筑波誌 (杉山友章著 再版 茨城 筑波神社 大正二・十) 八九丁 一冊
- 67 白河案内 (白河保勝會編 福島 編所 明治三四・三) 九五丁 一冊
- 68 親族正名 (太宰春台著 春輝堂 享保十・八) 五六丁 一冊
- 69 聽訟彙案全三 (津阪孝紳著 京都・大阪・津 天保二) 三冊
- 70 七國象棋圖 (宋司馬溫公著 江戸 山城屋政吉 万延二) (駒七種) 一五丁 一冊
- 71 董其昌山寺墨蹟 折本 一冊
- 72 武具短歌被甲便蒙 (江戸 須原屋茂兵衛 嘉永三・一) 疊物 一冊
- 73 清文軌範 (四屋取藏・小野増次郎編 東京 觀麥堂 明治二二・一) 一五四丁 一冊
- 74 池田忠繼・光仲公傳 (榜笈神社編 鳥取 榜笈神社臨時大祭 飯綴 二四丁 一冊)
- 75 鳥取藩及堀氏關係之事 (因伯時報切抜 大正六・一) 横帳 一七丁 一冊
- 76 慶徳公御歌 (梶川榮吉編 昭和二・六) 和綴 一冊
- 77 扇面 (金・銀の日の丸) 一冊
- 78 書類筆筒鍵 三ヶ 一本
- 79 算木・箴竹 (六本・三九本各袋入) 一本
- 80 扇 一冊
- 81 堀氏世々経歴史談 (竹内峴南 因伯時報新聞切抜) 横帳 一冊
- 82 筆跡肖像摺物 (堀根照編) 袋綴 五六丁 一冊
- 83 軍人勅諭拓本 (明治一五・一) 一枚
- 84 堀省齋伝 (竹内峴南著 新聞切抜) 一六丁 一冊
- 85 堀庄次郎先生伝 (竹内峴南著 鳥城三九号 大正八・一〇) 一六丁 一冊
- 86 堀照明伝 (鳥取県教育會編 大正六・五) 五二丁 一冊
- 87 因州藩士堀照明史談 (梶川榮吉講演 温知會 大正九・五) 一冊
- 88 維新史談 (竹内吉次郎著 土佐史談會 大正八・八) 一冊
- 89 堀庄次郎伝 (竹内吉次郎著 因伯時報大正四・一一 切抜) 一冊
- 90 敦斎夫子偉節太観 (竹内峴南 因伯時報切抜) 一枚
- 91 大阪冬之陣東西兩軍布陣圖 一枚
- 92 堀庄次郎上書草稿写真 一九丁 一冊
- 93 武家女鑑卷三 二枚
- 94 近世奇文 (松村榮吉編 鳥取 彰道館 明治一五・七) 二九丁 一冊

III 堀家について

『堀家』の「家譜」に依れば、堀家は「元御儒者」で、初代は玄溪となつてゐる。  
 儒者は、元来江戸幕府の職名で、儒学を進講し、文教を掌するもので、林家の世職となつてゐた。鳥取藩もこの職制になつたもので、「じゅしゃ」とも「ずさ」ともいふた。  
 玄溪が初代とされているのは、もちろん藩に仕えたのが彼以後だからで、玄溪の父は杏庵、祖父を思隠といひ、二人共医術を学んだことが知られてゐる。  
 堀家の家系を明確にすることは難しいが、その手懸りとなるものに家紋がある。堀家の家紋は「平四目結」で替紋は「角立四目結」であつた。一般に「四目結」の紋章は宇多源氏の代表家紋で、その一族は近江に定着し、近江源氏といわれたが、家紋はほとんど例外なく「四目結」であつた。  
 一方、宇多源氏との結びつきは定かでないが近江の豪族に堀氏があり、各地の堀氏で家紋を四目結とするものが見られる。(太田亮「姓氏家系大辞典」、沼田頼輔『日本紋章学』)なお、紋章には関係ないが、近江出身で江戸初期の儒学者として著名な堀杏庵(一五八五—一六四二)があることは、上記の杏庵とは別人であるが偶然の符合が興味深い。いずれにしても、堀家系を近江の出身と考ふる若干の根拠は考えられる。  
 「家譜」による堀家の諸代と、その役職等を次に摘記しておく。

初代 堀玄溪  
 享和二戊七月廿七日 御儒者に召出さる。五人扶持・銀拾五枚。  
 享和二戊九月十三日 御礼席金之間詰。  
 享和二戊十月十日 学館に於て講釈。  
 文化四卯正月廿七日 病死。  
 二代 堀金之丞、後溪叟  
 文化四卯十二月 玄溪跡式仰付けられ、家業(儒者)相応相勤む。五人扶持。  
 文化五辰六月十六日 学館に於て素読教授。  
 文化五辰十二月廿八日 学館に於て講釈。  
 文化八末七月十日 銀拾枚お返し。  
 文化十亥二月三日 若殿様(齊訓)之素読申上ぐ。  
 文政十三寅十月十九日 耀国院様(齊稷)御額髪御同板御銘認めを相勤め、御小袖拝領。  
 天保二卯二月廿二日 昵近御せ付けられ、御礼席御近習医師順席。御合力銀拾五枚を御支配三拾俵にお直し。

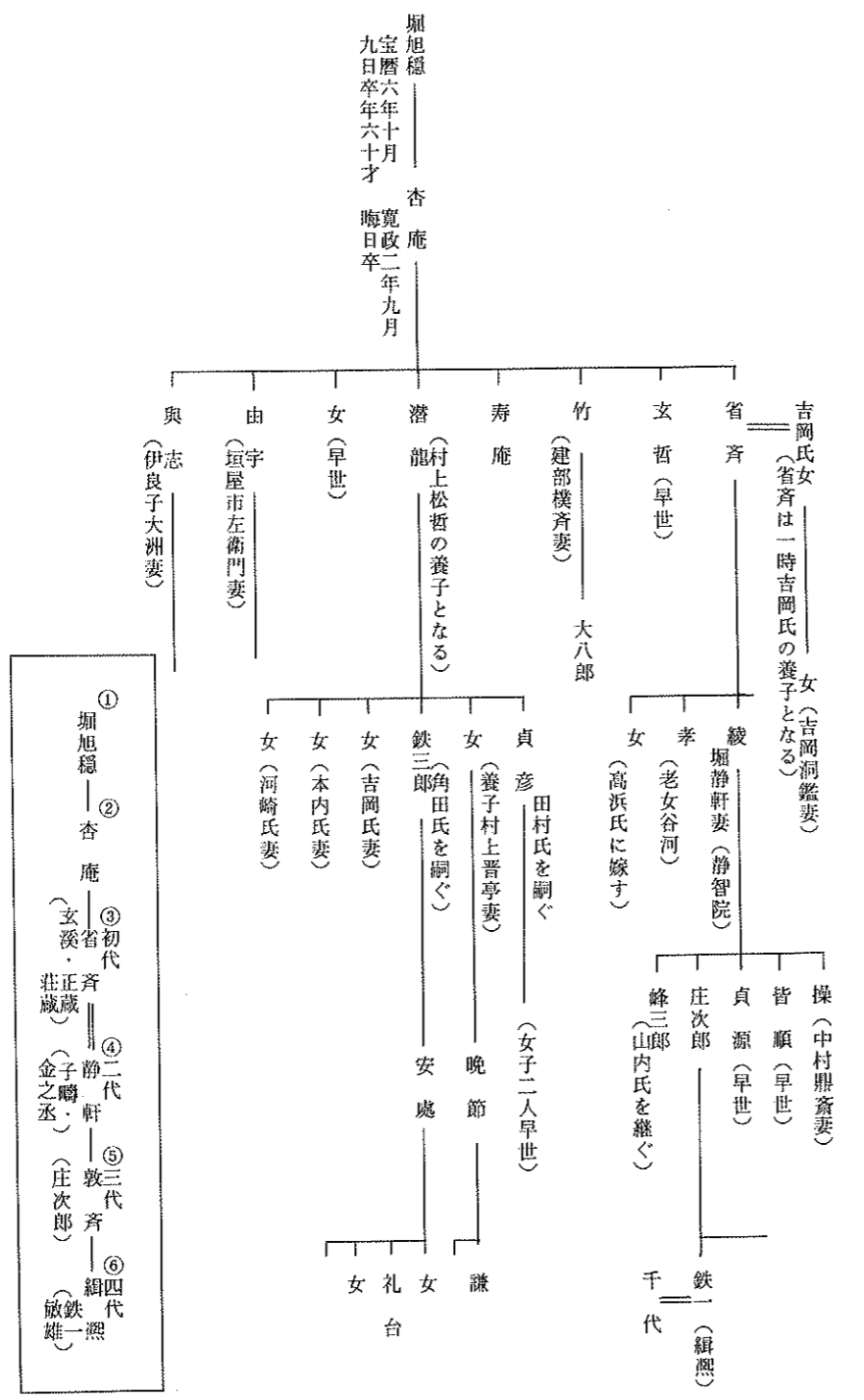
天保三辰四月七日 御礼席御近習の次。  
 天保三辰四月十八日 繼姫様・於素姫様(齊訓姉)に講釈。  
 天保三辰四月廿六日 毎月四日御座敷に於て御講釈。  
 天保九戌七月朔日 「武家諸法度」を読み上ぐ。  
 天保十一子七月廿二日 御加増拾俵。  
 天保十二丑 瑞徳院様(齊訓)御銅板の御銘文御用を勤め、御拾一ツ御領。  
 天保十三寅九月十八日 二宮李之助を申合わせ御素読御相手、講釈。  
 嘉永四亥九月十八日 死去。

三代 堀庄次郎  
 弘化三年六月廿二日 病氣の金之丞のため代勤。  
 弘化四未六月廿四日 学館に於て講釈を勤めるよう仰せ付けられる。  
 弘化四未十二月廿一日 御支配四拾俵 五人扶持。  
 弘化五子三月廿一日 学館御趣向御用懸りを仰せ付けられる。  
 弘化五子三月廿二日 御居間講釈仰せ付けられる。  
 弘化五子八月廿七日 儒学修行のため詰江戸仰せ付けられる。  
 安政元寅六月廿一日 昵近御せ付けられ、御礼席初野善蔵次。  
 安政三辰七月廿一日 左近將監様(東館仲律)御学問の御用を勤める。  
 安政六未十月廿一日 学校文場学正となり、御儒者・教授・助教らを指導する。  
 万延元申四月三日 学校御屋敷内に居住。  
 万延元申四月七日 学校御改正により学正の御礼席在御吟味役次となる。御役料三拾俵御文学御相手、其儘御昵近。  
 文久二戌九月九日 御役御免。御礼席佐善修蔵次。  
 文久二戌十月五日 学校奉行、学正兼帯。御礼席神戸大助次。仕人三人。昵近御内御用懸り当分兼帯。

文久三亥十二月廿八日 持病に付、家業御放無頭御馬廻り。但し暫時学校詰。  
 元治元子五月三日 御目付役。役中貳百石高仕人・御合力銀並の通り。  
 元治元子九月六日 夜前死去。  
 四代 堀緞熙、幼名鉄一・敏雄  
 元治元子十一月十一日 四拾俵、五人扶持。  
 明治元辰八月十八日 学校文場素読手伝。  
 明治二巳八月十八日 句読補。  
 明治二巳十月廿七日 中教正(分課漢字)

以上「家譜」について、主としてその家業を中心に概観したが、庄次郎の幕末期における政治活動については、別項にのべる。

IV 堀氏略系図



(註) この略系図は明治四十五年堀緞熙が鳥取藩史編纂所に提出したものであった。

## V 堀庄次郎について

堀家資料の中で、最も重要な部分は庄次郎関係史料である。

庄次郎については、「鳥取藩史」(昭和四十四年十二月刊、鳥取県立鳥取図書館)の第一巻藩士列伝にくわしいから、ここでは、庄次郎関係史料の理解に必要なことのみを記すにとどめる。

庄次郎は、天保元年八月六日、堀静軒の二男として鳥取に生まれた。諱は熙明、字は子光、教斎・玄竜などと号した。庄次郎の活躍は、弘化三年六月、父静軒の代動として学館に書を講じたのに始まる。

嘉永四年十二月、父静軒の死去により家督を相続した。翌五年閏二月、十二代藩主池田慶徳が初入国し、三月十五日、家老荒尾但馬を軍用御用懸、同池田式部を学館御用懸に任命し、ついで二十一日、堀庄次郎、野崎源蔵、溪大録の三人を「学館御用懸向御用懸り」に命じ、軍制・学制の改革に着手させた。

幕末における鳥取藩の藩政改革は、嘉永二年三月、新藩主(十一代慶栄一加賀前田齊泰の二男。嘉永元年十二月幕命によって池田慶行の遺領を嗣ぐ。)を迎え、家老池田兵衛介之貞が、用人不破平馬らを免職し、田村甚左衛門(貞彦)田村喜内(図書)を用人に登用したのがその始動と見ることが出来るかも知れない。しかし、この人事刷新も、嘉永三年五月藩主の急逝によって、改革にまでは発展しなかった。十月、水戸徳川家から五郎磨(徳川齊昭第五男、初名昭徳、後慶徳)を迎え、先にのべた嘉永五年の初入国によって、ここに藩政改革は開始されたのである。

学館の拡充に始まる藩政改革は、ついで国産役所を再興し、中野良助が長役に就任し(嘉永五年七月)、国産品の保護・官營を企て、積極的に藩内産業の振興をはかり、藩内自給策を進める段階に達した。安政元年七月、田村貞彦が「御用人其儘、御勝手懸」を命ぜられ、さらに十一月には郡代兼帯を命ぜられた。そして翌二年二月から「在方御改正」がはじまり、藩政改革は本格化する。

田村貞彦は、かつて西館(分知池田家)の財政整理を実施しており、嘉永元年用人に登用以来藩政の中核におり、新藩主の意を迎えて、藩政改革の推進の中心になるのである。鳥取藩史は「当時貞彦と志を同うするもの、軍政に津田

年十一月十日の頃には、「愚存之趣書付、文場次第書と致し、学校奉行明石友右衛門へ差出候処、友右衛門早速学校懸り御御用人白井重之進迄差出し、其後内々学校総督荒尾駿河殿文へ出し、同十二月十二日出し御飛脚白井より右書付を封して江戸中老田村図書迄相廻し、御前へ御伺いに相成ル。」とある。翌年正月、藩主の裁可があり、二月初旬の便で「文場改正次第」は鳥取に送られてくる。それには、藩主自ら朱筆で多くの書入れを加えていた。そして三月に入り家中に学校文場改正が通達されるのである。

安政五年十一月晦日、安達清一郎をたずねて水戸藩士矢野長九郎と関鉄之助の二人が鳥取にやってきた。来意は、同年八月八日の水戸藩への勅諭を「列藩に伝達し、姦臣を誅伐して、宸襟を安するに努め、以て威義両公以来諭ることなき一藩の赤誠を致したう、就ては、他日水戸義旗を挙ぐると聞かば、京都御守衛に馳せ参せられたし」(『贈従一位池田慶徳公御伝記』第八冊)というのである。

十二月二・三日には、庄次郎も清一郎ともに水戸藩士と会談し、その来意と対応方について田村貞彦、安達辰三郎に相談した。田村は、「応援之儀、甚左衛門(貞彦)・辰三郎・清一郎・庄次郎四人にて死を以て御受合申候」と答え、これを水戸藩に伝えるとともに、五日には「存意有之再動不致候旨にて相引居候処、ケ様之時節嫌疑杯にて引込居可申儀に無之候。」(『水戸藩史料』)と藩主に謁してこのことを内請した。

藩主は、「二条大納言より勅諭の伝達ありしことなり、天下の為とあらば避くべきにあらず、況や父子の誼みある水戸藩の申出でならば宜しく一藩の力を尽して事に当るべし。」(『贈従一位池田慶徳公伝』)と水戸藩の申し出に必ずすることにし、大阪警衛詰の増員を企てた。

水戸藩のこの画策は、実行には移されなかったとはいえ、「……四人死を以引請る」というように鳥取藩改革派がこのころを契機に尊王攘夷派を形成していくようになるのである。

ところが、安政六年十一月、改革派の中心人物田村貞彦が病氣にかかり、七月二月、中老を辞職した。これに対して、「在方御改革間モ無之、仕懸ケ之御用向も有之ニ付、在方小仕置被仰付候間、諸事は迄之通相心得……」とはい

伝兵衛有り。在方に佐野増蔵有り。堀庄次郎は学館に、中野良助は国産方に、安達辰三郎は財務に在り。共に相呼応して藩政諸般の改善を図る。」(『鳥取藩史』第一巻藩士列伝四三四頁)と述べており、田村貞彦を中心にいわゆる改革派が形成され、堀庄次郎もその一人であった。

改革派の中で、庄次郎が最も若年であるが、改革派の中心人物田村貞彦は、庄次郎の祖父堀省齋の弟村上潜竜の子で田村家に養子に入った人であり、庄次郎とは血縁関係にある。

中野良助・津田伝兵衛は、ともに庄次郎の父静軒の門人であり、田村・中野は若年の時学館教授と勤めたことがあり、津田も嘉永五年八月学館学頭になるなどそれぞれ学館に関係した。さらに佐野の実兄声川重周も学館教授であり、庄次郎は重周について学んだことがある。また、安達の子清一郎は、初め堀静軒の門に学んだ。改革派を形成した人々は、以前から互に親交があり、田村貞彦が藩政の中心人物として登場することによって、藩政に参与してきたのである。

ところで、安達清一郎は、父辰三郎に従って、大阪・京都・江戸に赴き、学問を修め、広く諸國の人物と交った。また水戸に遊学し、水戸の学風、神発流砲術等を鳥取にもたらし、京都留守居役を勤め、国事周旋にも奔走するなど、鳥取藩尊攘派として大きな足跡を残した。

安政五年春ごろまでには、土地関係の諸改革が一段落し、関係諸役人にそれぞれ賞与が与えられた。田村貞彦は三百石加増で六百石になり、中老在方小仕置に進んでいる。佐野は、新しく二百石を与えられ、無足から給人に榮進した。

在方改革が一段落して、安政六年ごろから軍制・職制の改革が本格化し、さらに第二次の学制改革が始まる。嘉永五年の第一次学制改革は、主として学館の規模の拡張であり、庄次郎はこの年九月学問修業のため江戸詰を許され、翌六年八月までほぼ一年間鳥取を離れている。

安政六年十月廿一日、庄次郎は、「学校文場学正」に任命される。「文場引請諸事締合之儀心を付可相勤旨、」を命ぜられ、学制改革準備にとりかかった。庄次郎の「尚徳館御改正以来日記」(一)(安政七年庚申三月)によると、安政六

ても、現実には、三月十八日、中老本役に進み三百石加増され六百石となった田村図書が、その後を引きうけることになる。図書は、嘉永二年以来貞彦とともに用人に登用されて以来、藩政の上で二人はほぼ同じような道を歩んできた。しかし、このころには、両者の考え方は大きく異なり、むしろ改革をめぐって対立するようになっていた。

万延元年七月ごろから翌文久元年にかけて、中野良助の始めた国産方の手懸りをほとんど廃止するなど安政改革の手直しが行なわれる。図書による改革に対する反動政策は、その背後に、下級武士層、在方役人層の改革に対する反動的気分の増大があり、それらの改革の手直しを求める空気の増大する形勢に依り、田村図書ら守旧派の保守的政策が展開されることになるのである。

藩内の改革！尊攘派と守旧派との対立抗争が表面化するのには、文久二年四月、五月に入ってからである。文久二年五月、帰国の途にあった藩主慶徳に、大原重徳らから京都留置、公武周旋の要請があった。しかし、この要請を受け入れず、二十六日、藩主はそのまま帰城した。六月勅使大原重徳が江戸に着き、時局は大きく動き出す。閏八月には諸候あるいは各藩の重臣がつきつきに入京して御沙汰書を受け公武の間の周旋に動き出すのである。

堀庄次郎、田村貞彦、安達清一郎、正藩黨ら攘夷派は、何とかして藩主上京を実現しようと画策するとともに、五月の伏見の一件を失体として、当時君側にあった和田邦之助、田村図書、高沢省己、伊丹甚太夫、二宮奎之助らの処分を藩主に強要する。これに対して九月九日、藩主は前述の保守派の人々に免職差控を命ずるとともに田村貞彦、堀庄次郎、正藩黨らについても免職の処分にした。

しかし、庄次郎と清一郎は九月二十二日、藩主上京について周旋の内命を受け上京し、大原重徳の親書を御得て十月四日鳥取に帰る。これによって藩主は上京することと決し、安達清一郎を京都御留守居に命じ、堀庄次郎は学校奉行学正に、田村貞彦は中老へと復職させ藩主上京に随従させた。慶徳は、十五日に入京し、二十日、参内して東下周旋すべしとの勅命を受け、二十一日江戸に向けて出発する。十一月三日からほぼ一ヶ月江戸に滞在し、将軍後見職一橋慶喜、政事總裁松平慶永等と談合して、奉勅攘夷に尽力することを勧められている。こ

の間、庄次郎は、桂小五郎（長）・植松庄左衛門（尾）、高崎猪太郎、岩下佐二右衛門、吉井中助（薩）・住谷寅之助、下野隼二郎（水）、松浦八郎（肥前）、岡崎鉄馬（土）、富田織部（三条家）、岩佐閔太郎（薩）、毛受鹿之介（越前）、小笠原唯八、西野彦之進、門田為之丞（土）、大野鉄兵衛（肥前）、三輪田豊二郎（高松）、今井金右衛門、西宮和三郎（水）など多くの他藩の志士と交渉をもっている。

十二月三日、藩主は江戸を発ち上京、庄次郎も一日先行して京都に向かう。十二月二十日、学習院で公武周旋について復命、翌文久三年正月四日、帰国の途につくのである。姫路まで進んだところ、幕命で再び上京することになり、三月下旬まで京都に滞留する。庄次郎は正月二十一日に帰国するが、二月二十日は、周旋見習の志士三人をひきつれ再び上京を命ぜられた。三月二十五日、帰国するが、途中藩主の帰国を知り「不堪驚歎」とのべている。そして帰国以來病氣と称して出勤せず、数回にわたって辞職を出願するとともに「宜退十条」の一書を提出している。庄次郎の辞職は五月十四日許されるが、その前々日には田村貞彦の隠居辞職の願いが許されている。さらに翌六月九日さきに伏見一件で免職になった保守派の高沢省己が小姓頭・側用人として君側に復職している。これについて、湯本文彦は、「形勢益否にして、職に居るべからず」、「今年より意見変じ、堀氏も事用ひられず、遂に病を称して辞職す」（『堀教齋年譜初稿』）と庄次郎の辞職の真相をのべ、「奉幕党漸々再動す」と藩内の情勢の変化を指摘している。

しかし、退役中の庄次郎は、五月三十日をはじめ、数回にわたって藩主に謁見し尊王攘夷に藩論を統一すべしとの建言を行なっているが、ほとんど採用されることはなかった。

六月十四日、大阪湾を守護していた鳥取藩は、天保山沖を航行中の英艦を砲撃し、攘夷決行とさわいだが、幸に大事には発展しなかった。学校奉行はやめても学正であった庄次郎は、書生激動鎮撫の事を命ぜられたり、長州使者の応接にあたりたりしている。

七月四日、長州使者の件で急に上京を命ぜられて上京する。この時、庄次郎は在京の藩内尊攘派と会するとともに、君側に居る保守派和田、加藤、早川、御尽力奉仰望候」と結んでいる。

九月五日夜、庄次郎は沖剛介、増井熊太の二人に自宅で暗殺された。沖、増井ともに周旋方の少壮士であった。彼ら藩内急進派は、禁門の変の時長州を援け、これに同調しようとしたが、上京してきた庄次郎に阻止される。この処置に不満であった。その上、九月四日藩論が征長出兵に決定した。これも庄次郎の然らしむるところとし、君側の姦臣庄次郎を除くのだといっている。庄次郎暗殺事件は「是ニ面挽回は万々無之と存候へ共」、「不得已ニ一事を差起」（沖剛介遺書）と剛介がのべているように剛介、熊太二人の私的な行動であって組織的なものではなかった。時に庄次郎は三十五才であった。

『教齋夫子門人帳』（庄次郎自筆）には、家老荒尾但馬悴若太郎をはじめとして、二百三十九名という多数の門人の名前が記されている。中には、近郷の医師の子弟や浪人の子弟の名前もあるが、大部分は家中の子弟であり、学館で師弟であったと考えられる。

どちらにしても、庄次郎は家中の青少年に大きな影響力があった。したがって、退隠中も「書生激動鎮撫の事」を命ぜられ、それが彼の立場を複雑にしているともいえる。

庄次郎の影響力は、青少年だけにとどまらなかった。改革派藩内尊攘派の中心であり、そこに集る多くの人々との交流があった。庄次郎の日記にはそれが詳細に記されているが、ここに、庄次郎をめぐる二、三の人物（書状が残っている人）について、略説しておく。

明石友衛門（天明八年一明治四年）明石増左衛門の養子、文政十一年跡式を承ける。（五人扶持四十俵）御積役・御算用開・御勘定目付・裏判吟味役・蠟座奉行・在吟味役・江戸上屋敷普請奉行等を歴任し、三十五年におよぶ。その功により安政五年新知二百石を給う。六年学館奉行兼目付役になり、元治元年隠居。穩健な攘夷論者。

正塩薫 新蔵・適処、（文政元年一明治八年）、藩医泰庵の子、佐藤一齊に学び昌平学に入り、また大阪で篠崎洞の塾に留まる。嘉永二年姫路藩仁寿校の聘に応ず。嘉永六年、鳥取藩はこれ呼び帰し、学館勤務を命ず。学制改革には早くから関心をもち、学政改革意見を建白しているが、安政六年六月には、学校吟味役文場係となり、庄次郎とともに学政改革に当る。文久元年命をおび

高沢らとも会談し、七月二十二日「午前米召、乃入本国寺本館、不得謁、遂与安清造黒部酒食、共談国事、不堪憤激私袂」（堀庄次郎日記）と大議論におよび決裂した。この間久坂元瑞、中村九郎等長州藩士とも会談し、八月十八日鳥取に帰ったが、十九日になって、急命により再び上京する。ところが、庄次郎が京都を出発した直後の十七日、河田佐久馬ら藩内急進尊攘派二十二名が、黒部権之助、高沢省己、早川卓之丞、加藤友十郎の君側の保守派を襲った、因幡二十士事件がおこり、翌十八日には、いわゆる「八・一ハクーデター」があり、京都の情勢は急変していた。

二十三日再び京都に入った庄次郎は、二十士の助命等にも奔走し、十月十六日藩主帰国に先だつて鳥取に帰った。帰国後の庄次郎は病氣と称してほとんど出勤していない。そして十二月二十三日再び辞職願を提出し、二十八日、「病氣之儀ニ付願之通御役被成御免候……格別此度家業被成御放無頭御馬廻り被仰付」（堀家家譜）となり藩政の中核から離れてしまった。元治元年正月九日から二月朔日までは、岩井温泉に湯治に出かけている。しかし、鳥取に帰ってくると多くの人々が訪ねてくる。

五月三日、庄次郎は目付役を命ぜらる。これより先、田村貞彦は政事加談を、津田伝兵衛は軍鑑再動を命ぜられている。長州藩の動き、参予会議の解体等複雑な情勢変化に対応するためであったであろう。六月二十五日、長州大挙東上の報が入った。目付役庄次郎は急遽上京を命ぜられ、七月八日入京する。

七月十九日、禁門の変がおこり、庄次郎はこれに対する藩の対応策、長州と通じているとされる二十士の保護に急がしい。この間のことは彼の「元治元年甲子七月京都詰中日記」にくわしい。長州藩は敗走し、長州征討令が出される。一方、庄次郎の努力にもかかわらず二十士は京都から日野郡黒坂に移され、幽閉されることになった。八月十九日、失意のうちに帰鳥すると、すでに田村貞彦、津田伝兵衛、河崎政之丞、神戸源内、土肥謙蔵等尊攘派は一切免職となっていた。登城し藩主にその理由をただすも返答なく、庄次郎は二十一日またもや病氣と称して引こもってしまう。そして、八月二十四日、在京の家老鶴殿主水介に書状を送り、藩論多岐に分れ紛糾せる状態を報じ、藩要路に受け入れられない自分の意見を記し、「此上何卒憤発不陥手疎暴鎮静不干因循様仕度此辺

て九州に赴き、諸藩の事情を探索する。正塩は、庄次郎とともに藩内尊攘運動のリーダーであり、国事周旋に奔走する。元治元年九月、庄次郎が暗殺され、尊攘派が後退すると、正塩も、免職謹慎となり、これを機に高草郡長谷村に隠棲し、明治元年三月まで、藩政から遠ざかっている。

土肥謙蔵 実匡、石斎と号す。（文政九年一明治三十三年）、安政元年江戸詰の儒者土肥権右衛門の養子となる。藩邸内学問所で諸士を教える。文久二年鳥取に帰着、御側役となる。文久三年五月御側役から周旋方頭取、記録方根取直書掛となり国事周旋に奔走する。

元治元年正月、庄次郎の跡をうけ学正となる。薩長の和解を周旋、また備芸・浜田・長州に使用して、長州上京出兵の不可を説く。九月、征長出兵に藩論が決すると、他の尊攘派同士とともに辞職す。明治元年二月徴士参与内国事務局判事となり、新政府に参加、刑法官判事、監察使を歴任、二年四月山梨県令となるも六月免職となる。晩年は、池田家の依頼により「鳥取藩史」の編纂に従事する。

佐藤元立 修蔵、舩山と号す。大阪の篠崎病に学び、さらに江戸の河田屏浦に師事する。安政六年、学校吟味役兼小文場頭取となり、文久三年周旋方として京都に上る。藩論を統一し、攘夷にあたらんとし、二十士事件に加わる。脱藩して国事に奔走。明治元年幕藩を許され、鳥取県大蔵・置賜・大蔵省等に歴任する。

中野治平 名は元長、扇山と号す。安政六年十月、学館教授に就任、文久三年三月探索方を命ぜられて上京する。八月十七日、本國寺に側用人黒部権之助等を襲った二十士事件に参加し、幽閉される。慶応二年七月、脱藩して長州に走る途中、雲州手結浦で黒部等の追手に襲われて死す。時に二十九才であった。

白井重之進 白井重兵衛（二百石）養子、文政十一年、十八才で家督をつぎ表小姓、近習、御目付役、御側役、御用人等を歴任、この間、慶行、慶栄、慶徳と三代の藩主が交代するが、ほゞ一貫してその側近に勤仕している。文久元年三月中老に就任、藩主の側近が尊攘派、守旧派とめまぐるしく交代しても彼はやはり君側をはなれず、学校・神社・普請方などを担当する。元治元年五月急進尊攘派沖剛介・山内衡らは、重之進を君側の奸と論難し、辞職を迫る。重之進は、その応答不宣として免職され、以後表面だった動きはなくなる。

二宮奎之助 天保元年十二月軍役より御儒者となる。保守派  
初野善蔵 江戸定詰御儒者。

## VI 堀文庫資料の概要

### I 文書・古記録

堀文庫の中の文書・古記録は大きく八項目に分類した。

(一) 鳥取池田家関係は堀家が御儒者であったことによるものである。御儒者の役目の一つに、系譜御用・御講撰定等のことがあり、二代静軒は、天保元年七月、系図懸りを命ぜられ、同年十月には「耀国院様御額髪御銅板御銘認」、同十二年十月には「瑞徳院様御銅板之御銘文御用」を勤めている。さらに三代庄次郎も安政六年五月二十六日、系譜取調を命ぜられており、このような勤向の関係で伝存された史料である。

仮目録の一七・八・九・十・十二などは、御儒者としての静軒・庄次郎(敦齋)の仕事である。また、一八の史料は、安政二年四月に幕府に提出した分知池田清直の心当養子願であり、めずらしい史料である。

### (二) 堀家筋・家祖関係

堀家は、享和二年七月、堀玄溪(正蔵・省齋)が御儒者に召出される。したがって、鳥取池田家史料「藩士家譜堀家」では、堀玄溪(省齋)を初代としている。しかし、それ以前の堀家を明らかにする史料は少ないが、省齋が儒者として池田家に召出されるまでは、智頭郡用瀬村や鳥取城下で浪人医師であったらしい。家伝によると家祖は堀旭穂で、元禄九年に生れ、やがて用瀬に至り医業を営み、宝暦五年十月用瀬に没したという。その子杏庵は、藩医岸本周哲について医学を学び、後京都に遊学し医学を研究するとともに池大雅にも師事し書法を学んだともいう。杏庵には四男・四女があり、玄溪(省齋)はその長男であり、堀家としては三代目である。四男潜龍は、藩医村上松哲に養われ、名医として名をはせた。また長女竹は建部横斎に、四女與志は伊良子大洲に嫁しており、この時期の堀家は、まさに藩内きっての学者文人の集るところとなつた。

ここには、二一・一八・九のように杏庵に関する史料も収めておいた。

### (三) 省齋関係

十二代藩主とするまでの記事である。

この外に、静軒書状(一通)および静軒宛書状が残されているが、そのほとんどが家族およびその一族の間で授受されたものである。ただ一通、二宮奎之助書状(年月不明、天保元年ごろか)は、江戸詰の静軒に、同じく儒者で系譜懸りを命じられていた二宮奎之助が系譜等についてのべた勤向に関する書状である。

### (四) 敦齋関係史料

先にものべたように、庄次郎・敦齋関係史料は、堀文庫の中でも最も多い。伝記・書上も多くの人々によって著わされているが、藩史編纂長湯本文彦は、庄次郎と面識もあり史料も丹念に調べており、その「堀庄次郎年譜」は信頼するに足るものである。また藩史編纂員であった竹内吉次郎(峴南)も庄次郎をはじめ、堀家の人々の伝記を多く著わしている。

しかし、庄次郎関係史料のうちとくに注目すべきものは、日記・記録および書状と文庫の中に入れた建白・意見書草稿の中に多い。

堀敦齋日記 敦齋の日記は、嘉永二年正月十八日にはじまり元治元年九月四日に終る十六年間にわたるものである。

- 一 嘉永二年正月十八日―同三月廿一日
- 二 嘉永二年三月廿一日―同十二月卅日
- 三 嘉永三年正月朔日―同十二月晦日
- 四 嘉永四年正月元日―同十二月廿九日
- 五 嘉永五年正月元日―同九月廿一日
- 六 東行日記全 嘉永五年九月廿五日―嘉永六年九月八日(江戸詰中の日記)
- 七 嘉永六年九月八日―嘉永七年(安政元年十二月三十日)
- 八 安政二年正月元日―同十二月廿九日
- 九 安政三年正月元日―同十二月三十日
- 十 安政四年正月元日―同十二月三十日
- 十一 安政五年正月元日―同十二月廿九日
- 十二 安政六年正月元日―同十二月廿九日
- 十三 安政七年正月元日―同十二月三十日

省齋に関する史料は、詩稿・文稿が中心である。これらは、ほぼ堀編撰の手で整理・編集されたものであり、「挾仁便覧」は、論語・孟子をはじめ易経・礼記等から「仁」という文字・語句を引出し、仁について論じたものである。この外、論語・孟子・易等に関する論考もあるが、それほどまとまっていはいない。

### (四) 静軒関係

静軒は、省齋の養子で、範胤、通称金之飯、字子疇・静軒と号した。文化四年十二月家督を嗣ぐ。

静軒関係史料の中で、重要なものは、四一―二一「鳥取藩儒官堀金之飯静軒君日記」と名づけられた静軒の日記八冊である。この日記は、静軒の自筆で、「備忘録」と原題が付されており、文政十二年己丑正月より始まるものに「一」と記されている。天保三年正月からのものに「四」、同四年が「五」となっているから、文政十二年正月から、一年に一冊の日記がつくられ、静軒の没する嘉永四年九月十五日までつづいたと考えられる。しかし、現存するのは次の八冊である。

①文政十二年正月―十二月、②天保三年正月―十二月、③天保四年正月―五年四月帰国まで、④天保六年三月朔日発途―七年五月帰国まで、⑤弘化四年正月―五年(嘉永元年)十二月まで、⑥嘉永二年正月―十二月、⑦嘉永三年正月―十二月、⑧嘉永四年正月―九月十五日、(九月十六日死去)の約八年間分である。

この日記は、月日を逐い、(文政十二年正月)「元日、風雪平地雪深二尺餘朝賀、公以疾不受賀、世子代受焉、午後退詣大夫・小宰之門、及族戚・朋齋之宅賀、嘔吐返。去臘廿七日」というような略漢文体で日々の事を摘録している。

この他、省齋・静軒公事心覚、堀静軒公事心覚の二冊がある。前者は享和二年省齋が御儒者に召出され、その請書の控からはじまり、途中から「年中提要雑記」と記され静軒の筆となる。静軒の記事は、文化四年正月十八日、堀玄溪養子願の件からはじまり、同六年十月までで終る。後者は、嘉永三年五月三日から嘉永四年七月二十八日までの記事で、その内容は、十一代藩主慶栄の初入園の発途から、伏見での発病・死去、そして水戸徳川家より五郎磨(慶徳)を迎

十三 万延二年正月元日―同十二月三十日

十四 文久二年正月元日―同十二月廿九日

十五 文久三年正月朔日―同十二月三十日

十六 文久四年正月元日―同九月四日

この間は、庄次郎の二十才から三十五才までの十五年間である。日記または日録と記されているが、嘉永五年九月廿五日から同六年九月八日までの一年間の日記は、東行日記と名づけられている。これは、嘉永五年八月廿七日「……儒学修行え江戸表え龍越中候得共、自力ニ龍越候儀も難致ニ付、詰江戸被仰付被為下候様」と願ひ出、許されてはじめて江戸に下り遊学中の日記である。これら十七冊の日記は、静軒日記と同様の体裁をとっており、略漢文体で日々の事を摘録している。内容的には簡略な記事が多いが、多くの人々との交流はくわしく記されており、庄次郎の他の日記や安達清風日記等と合せて見ると有力な史料となる。

庄次郎の他の日記とは、「公事心覚」九冊・「尚徳館御改正以来日記」五冊「御日付役被仰付候始より日記」一冊、「元治元年甲子七月京都詰中日記」のこ

とである。「公事心覚」は、嘉永五年正月から文久三年十二月までの期間である。庄次郎は嘉永四年十二月廿一日に家督を嗣ぐ、そして翌五年御儒者としての正式な勤がはじまる。そして文久三年十二月、病氣を理由に辞職を願ひ許される。つまりこの間の勤向に関する日記が「公事心覚」である。

「公事心覚」の記されている期間に、もう一つの勤向に関する日記がある。「尚徳館御改正以来日記」とか「尚徳館日記」とか名づけられている五冊である。この日記は、安政六年十月二十一日より文久二年八月二十九日まで終る。安政六年十月二十一日、庄次郎は文場学正に任命され、第二期の学制改革に着手するのである。文久二年八月には、庄次郎らは保守派の処分を藩主に強要し一時引こもるが、十月ごろから翌三年十月ごろにかけては、京・江戸に出て國事周旋に奔走している。文久三年十二月、藩論は保守派に傾き、庄次郎ら攘夷派は辞職する。しかし、元治元年五月、目付役に任命される。これは藩内外の複雑な政治情勢に対応するため、長州藩上京の報が達すると、庄次郎は上京を

命ぜられ、七月八日京都に入る。「御目付役被仰付候始より日記」、「京都詰中日記」はこの間の日記である。

庄次郎意見書・建白書 庄次郎関係史料で日記・記録同様に重要なものに、意見書・建白書等の草案がある。

「献芥鄙策」・「生育問答」 「文場改正次第書」などは、まとまった建策である。安政元年五月、藩は家中に海岸防禦、その他の意見を提出させる。「献芥鄙策」はそれに応じた庄次郎の意見書である。家中勤怠の評定、砲術熟練者の養成、家中の救済、役人の公選制、世職家業の廢止と人材登用、民の疾苦と在方役人のこと、学館振興策等二〇ヶ条におよんでいる。

「生育問答」は、「或人予にいふて曰く、近年在中生子を挙げず、又孕婦を墮す事甚流行して……我今郡村の事を司とりて、これを憂ふること久し、いかにして此風止むべきや」との間に庄次郎が答えるという形で書かれている。この或人とは、安政元年十一月郡代になった田村貞彦と考えてよいのではあるまいか。庄次郎は、問引きや墮胎の流行の原因を貧農の増加と見る、さらにその原因を富農・豪農の蓄財にありとし、彼らの蓄財は「此小民の膏血をとり過分の剝奪を行ふが十常に八九に居ることなれば悪むべきもの」としている。

ところが藩は、これら豪農から献金を受け、彼らに苗字帯刀を許している。困窮のためといながら結局は豪農の私欲のためであり、藩庫や豪農にとつては益となつても、小民にはうらまれており、この策は天道にも人情にもかないがたい。西洋には「養育院」というものがあるが、これに準ずる方法として、村々の富農に、村の小民の出生の子を養育させその勤功により、苗字帯刀を許すなどすればよいとのべ、庄次郎の社会認識を知る上でもおもしろい。安政改革の生育米制度はこれによって発想されると見ることもできよう。

「文場改正次第書」は、「学校改正意見書」とか「秘書」など一連のもので、先にのべたように、庄次郎が文場学正に就任し、文場改正に関する意見を記したもので、安政六年十二月には藩主のもとに提出され、翌年正月裁可があり、三月から実施にうつされるのである。庄次郎の考えが直接的に藩政に実現されたのは、これが最初であり、重要な意味をもつ建策である。「秘書」とされたものは、「文場改正次第書」に藩主の朱書・圈点が入っているからで

「……」とあり、攘夷期限の決定を朝廷・幕府に要求することを建言したものである。湯本文彦はこれを「安政元年七月」のものとしているが、文中に「癸丑之年にて御座候て、其以来十一年に及……」とあり、文久三年と考えざるを得ない。同年三月二十六日の教齋日記に「午后入朝謁公、遂入学……」とあり、このころのものと考えられる。

(5)は、教齋日記の五月三十日に「午後登朝乞謁白事……」とある建言で、三月二十三日、帰国以来「主上ほとんど幽閉御同様の姿」であつた藩主に、上京困事周旋を進言し、それにあつては、勤王の決心を固めての上の上京でなければならぬことをのべている。藩主は六月二十一日上京の途につく、(6)はその前、つまり(5)の建言からそう遅くない時期のものである。「今日尤も恐入奉存候は、上下人心之折合ニ御座候」との書出しではじまり、側近の要職と執政大夫の対立、執政大夫と結びつく周旋方など藩内の派閥対立の様子をのべ、藩論の統一をすすめることの必要を説いているが、この時、庄次郎・貞彦などの一派（湯本は正義派とよんでいる）は、両者からそれぞれ敬遠された立場にあり、側近派の佐幕論にも、周旋方執政の主体制を欠いた藩外制内策にも同調しない、藩独自の立場を主張している。

(7)の建白は、「因伯御兩國にて末々迄長州征伐と承候へハ、是非御断申上候など申候もの十に八・九に御座候」と討長出兵の不可を論じ、それよりは、「今日摂海之夷寇之大變を其儘被遊、一派之御尺力不被為在候へハ、御家ニは天下の人心望を絶候……」、「何卒早々御人教御繰出し、摂海へ警備被遊、御前にも新しく上京」、「交易勅許等之儀は死を以御諒争被遊度奉存候」と大胆な建策を行なっている。書止めに「誠惶誠恐頓首々々死罪々々」とあり庄次郎の覚悟の程をうかがわせる。湯本文彦は、この建策を文久三年九月下旬ごろと推定しているが、「今日長州人陳暴相働候ニ付……」とか「討長の儀既に紀州ニても御断り、尾州にても多分御断……」からすると、第一次討長令が出された元治元年七月二十三日以降八月二十日までの間、とくに八月十八日帰鳥直後のもので考えるのが妥当であろう。

庄次郎の意見書は、この外にも「尚徳館に編集局を設ける意見書」（年月不明）、「学館に吉備公を祭ることの不可を論ずる意見」（思出し手録）とがあ

ある。藩主慶徳の朱書は、「当時教授・助教ハ皆若輩也、人の師トナルヘキトモ思ハレス、考アリタキ事」、「格祿ニ拘ハラサル事、毎度我等カいふ所也」からはじまり、階級進級をのべたところには、「試法ハ急度右度事、以後ハ大夫も試法ニかけての上ニて職役命度事」などあり、また、「……年去、但馬粹近江、乾杯ハ黄口の小児放れニ候へとも、中々以職儀ナト可勤学力あると思はれず、只々着座の風にて怠惰に流れ候のみにて、己の弱幼を不知、去而老輩の者をいやしみ……」と慶徳の藩政に対する考え方が直接にうかがえる好史料でもある。

庄次郎の意見書・上書の草稿は十点余残されている。安政五年、江戸詰の時慧星があらわれ、これについて星占ないをすること命ぜられ答申書を提出している。しかし、この答申は単なる星占いではなく、庄次郎が日ごろいっていた藩政についての意見をのべている。この一通を除くと、庄次郎の意見書はほぼ文久二年から元治元年の四年間に集中している。

このうち藩主への上書は、謁見を請い、意見をのべたものの草稿であり、次の七点の草稿が緝熙の手で三巻の軸（目録五・三・一・一・一・一・一）にまとめられている。

- (1) 文久二年八月二十三日
- (2) 文久二年九月六日
- (3) 文久二年十二月
- (4) 文久三年三月下旬か四月上旬
- (5) 文久三年五月三十日
- (6) 文久三年六月初旬か
- (7) 文久三年九月下旬か

(1)・(2)は、一連の意見である。文久二年五月の伏見での一件に端を発する鳥取藩の尊攘運動に関するもので、早く藩論を尊攘に決定し、五月以来の側近保守派を処分し、藩の態度を明確にすべきことを進言している。この直後の九月九日、藩主は保守派・尊攘派ともに免職の処分をしている。

(3)は、脱藩し国事に奔走・周旋している少壮藩士に対し、寛典の処分を願ったものである。(4)は、「愈交易御断、群夷拒絶と申期限御乞被成候を最上策

る。さらに、文久三年七月二十一日、京都本願寺において保守派の一人側用人黒部権之助と藩主についての大論争をしている。この時の庄次郎の考えを記したものが「教齋と黒部権之助論問答」（漢文体 五―三―一四）である。元治元年七月、目付役になっていた庄次郎は、再び京都に派遣される。京都に居た鳥取藩急進派は、長州に合して会津・桑名を伐たんと主張し、それが大勢を占めようとしていた。庄次郎の上京はその阻止にあつた。この時、松田正人・中野治平ら急進派との論争を書きとどめたものが「教齋意見書」（「元治甲子之變京師詰中三論」）（五―四―二）である。

この他、意見書・建白書ではないが、時勢を論じたものに「癸後編」・「質疑一道」がある。「癸後編」の成立年代は不明であるが、文久二年四月のことにはじまって同年九月九日、学正を免ぜられるまでのことが、漢文体でかなりくわしく記されている。「質疑論」は、短文の漢文である。この一編は、「國家多難安存亡の間に立ち無限の苦衷満腔の経略」を述べたものであるが、文末を「左右具説吾不能焉、我唯待吾千載之知己而已」と結んでいるところからしても、元治元年八月二十四日以降九月五日までの間に、藩主にも左右両党にも容れられず、失意のうちに書いたものであろう。

庄次郎関係資料で、もう一つ重要なものは、庄次郎書状および案文と庄次郎宛諸家書状で、九十点におよぶ。これらのうち庄次郎書状十八通は、湯本文彦によって「堀教齋遺稿」に書翰類として整理されていたが、他はほとんど未整理であった。今回の調査で年代を推定し、仮目録に簡単な内容を註記したのでこれ以上の説明は省略するが、元治元年八月廿四日付で、京都に居た家老鶴殿主水介宛の書状案は、このころの藩論や庄次郎の立場をよく伝える史料である。

#### 丙 緝熙関係資料

四代緝（譜）熙（鉄一・敏雄）は、元治元年十一月家督を相続するが、この時十二才であった。明治元年になって学校文場素読方手伝になつたくらいであり、目ぼしい資料はない。ただ、鳥取藩史編さん事務所が堀家資料を重視したこともあって、編さん員竹内吉次郎の書状に注見すべきものがある。

#### 戊 谷河関係資料

谷河は、堀省斎の次女で本名孝といい、庄次郎の伯母に当る人である。文政

六年十二月、二十一才の時、御女中となり奥向に上る。文政十年、公女繡姫（斎櫻長女）付となり江戸に赴く、天保八年十二月、繡姫が武蔵国忍城主松平忠彦に嫁すとこれに従う。

嘉永の初年、鳥取藩は奥向の改革を行なうが、この時、乞われて鳥取藩邸に婦仕する。文久二年八月六十才で没するまで、老女として藩邸奥向に勤仕した人である。資料点数は多くないが、藩政改革期の奥向の様子をわずかに伝える資料である。

#### (V) 其の他記録・写本

この頃には、堀家の歴代の文・詩稿・書状・書上等以外写本・記録を取めた中でも（八一―43）の鳥取藩時尚徳館全図は、藩政資料の中にも藩校尚徳館の図が一枚しかないだけに貴重な図である。

## II 書・画

書・画は、書が大部分である。中でも堀省齋とその妹婿建部模齋は、当時藩内きっての能書家であった。また池田冠山は世に知られた学者大名であるが、静軒と親交があり、「静軒」の横額を送っている。

書の中には、多くの短冊がある。短冊には谷河のもの五八枚があるが、これは谷河関係資料におさめておいた。

## III その他図書資料

堀家に伝わった、木版・活版等により刊行された図書を取めた。これが堀家蔵書のすべてであるかどうかははっきりしないが、現存するそれから見ると、その集書に、はっきりと「儒者家」としての特色を見ることはできない。

江戸期の刊本をいくらか伝えてはいるが、図書の多くは緞熙の時代に集めたものである。

## あとがき

堀文庫が鳥取県に寄贈されて約二十年になる。その間、萩原直正氏によって一応の整理が行なわれていた。資料を寄贈された堀千代氏も整理された萩原氏も、この世を去られて十数年になる。今日、残された記録以外に、堀家資料に関する諸事情をたずねることは、大変むづかしい。

今回の調査・整理もまだまだ満足のものではない、これとても「一応の整理」といわねばならないが、しかし、これで一応の公開・利用はできると考えている。

整理に当って、堀家代々の文稿・詩稿等の解明が不充分であり、したがって堀家の「御儒者」としての特質等を明らかにし得なかったのは残念であり、これは今後の研究にまっほかはない。これらの解明は、鳥取の近世思想史の研究に何らかの手がかりを与えてくれるものと思われる。

堀家資料がもっともよく利用されたのは、「鳥取藩史」・「贈従一位池田慶徳公御伝記」編さんの時であったといえよう、藩史の編さん長であった湯本文彦氏は、直接に堀庄次郎の教えを受け、当時の事情をよく知っていただけに、特別な感慨をもって、資料を整理し、利用している。

藩史編さん以後、堀家資料を直接に利用した研究は今日までほとんどない。どちらにしても、今後の鳥取藩幕末史の研究は、この堀家資料を詳細に分析しなければ前進しないと考えられるのである。

昨年十一月から、当館の囑託に、鳥取大学名誉教授徳永職男氏を迎えた。氏は、当館史料係の設置に格段の尽力を惜まなかったが、今後は、資料の調査・研究・整理等について御指導いただくとともに、来館者の研究・調査についても助言いただけることになっている。本調査報告でも、「堀家についての」一項目は、先生の執筆になるものであり、また、報告書全体についても指導を受けた。